

殺人容疑の私を拾ったのは、危険すぎるイケメン探偵でした。～彼のそばにいただけで罪は隠せるらしいけど、心まで盗まれそうです～

午前二時を回った住宅街に湿った夜風が吹き抜けていた。街路灯の乏しい路地裏には生ゴミの饅えた匂いが澱み、遠くで救急車のサイレンが薄い膜のように街を覆っている。私はマンションの外階段を一段ずつ、まるで死刑台へ向かう囚人のようにゆっくりと上っていた。鉄製の手すりは冷え切っていて、触れた指先から体温が奪われていく。

五階の自室の前で足を止めた瞬間、背筋を冷たいものが走った。ドアがほんの数センチ開いている。確かに施錠したはずだった。朝、出かける時にガチャリと音を確認した記憶がある。それなのに、今、私の部屋の玄関は薄く口を開けて中から廊下の明かりが細く漏れ出していた。

心臓が早鐘を打ち始める。手のひらにじつとりと汗が滲んだ。警察に通報すべきか、それともこのまま逃げるべきか。けれど私の身体は思考よりも先に動いていて、震える指先でそっとドアを押し開けていた。

玄関には、見慣れない革靴が一足几帳面に揃えて置かれていた。サイズは大きい。男物だ。土足のまま上がり込んだ形跡はない。それだけで相手が常識的な人物だとは限らないけれど、少なくとも泥棒の類ではないのかもしれない。いや、そんなはずがない。不法侵入に変わりはないのだから。

私は音を立てないように靴を脱ぎ廊下を進んだ。リビングの明かりが漏れている。息を殺して覗き込むと、そこには一人の男がいた。

ソファに深く腰掛けて、片手にウイスキーのグラスを揺らしている。私の部屋の、私の酒を勝手に開けてまるで自分の家のように寛いでいた。黒いシャツの袖を肘までまくり上げた逞しい前腕。無造作に掻き上げられた癖のある黒髪。彫りの深い横顔が、オレンジ色の間接照明に照らし出されている。

その顔を、私は知っていた。

「……やつと帰ってきたか」

男はゆっくりとこちらを振り向いた。切れ長の瞳が、暗い光を宿して私を捉える。薄い唇の端がほんの僅かに持ち上がった。

「誰だと思ってる」

「……霧島、さん」

声が震えた。喉がからからに乾いている。

霧島怜。この界限では知らない者のいない私立探偵だった。警察ですら手を焼くような面倒な案件を、いつの間にか解決してしまう。そんな噂のある男。けれど同時に、彼に関わった者は必ず何かを失うとも言われていた。危険な匂いのする、綺麗な獣のような人。

「何で、私の部屋に……」

「お前が人を殺したからだ」

あまりにも平坦な声だった。だから一瞬、何を言われたのか理解できなかった。頭の中で言葉が反響する。殺した。私が。人を。

「な、にを……」

「とぼけなくていい。昨夜、この部屋から男が出て行くのを見た。

正確には、お前が男の死体を運び出すところをな」

ソファの前のローテーブルに、グラスが置かれる。小さな音が静寂の中でやけに大きく響いた。霧島さんは立ち上がり、ゆっくりと私の方へ歩いてくる。距離が縮まるごとに、彼の纏う空気の重さに押しつぶされそうになる。

「違います、私は、そんなこと……」

「否定するならしてもいい。だが、お前の車のトランクには今も血痕が残っている。昨夜の雨で流しきれなかったんだろう。助手席のシートにも、ルミノール反応が出るぞ」

私の顔から血の気が引いていくのが分かった。足元がぐらぐらと揺れる。壁に手をつかなければ立っていられなかった。

違う。違うのに。確かに昨夜、私の部屋から男が出て行った。けれどそれは死体なんかじゃない。ちゃんと生きていた。自分の足で歩いて、階段を下りて行った。それなのに。

「……違う。あの人は、生きて帰ったはずです」

「お前がそう思い込んでいるだけだ。現に、そいつは今朝河川敷で死体で見つかった。撲殺だ。後頭部を鈍器で殴られていた」

霧島さんは私のすぐ目の前で立ち止まった。見上げるほどの長身。彼の影が私を覆い尽くす。黒い瞳が、値踏みするように私の顔を見下ろしていた。

「依頼人の依頼でな、お前のことを調べていた。昨日の昼間お前はそいつと口論していた。目撃証言もある。夜になって、お前の部屋に男が上がり込むのを見た者もいる。そして今朝、死体で発見された。動機も状況もすべて揃っている」

「調べていたって……誰に、誰に頼まれて」

「それを今お前に言うと思うか？」

低い声だった。心臓が握り潰されたように痛い。呼吸が浅くなる。この人は私を追い詰めようとしている。けれど私には反論の余地がなかった。確かに昨日、私はあの男と口論した。大声を上げてしまった。近所の人が聞いていたとしてもおかしくない。夜になって彼が私の部屋を訪ねてきたのも事実だ。そして彼は、深夜に一人で帰って行った。私はてつきりちゃんと家に着いたものだと……

「信じられないなら、明日の朝刊を見るといい。小さく載ってるはずだ。河川敷の死体遺棄事件としてな」

彼の言葉はまるで私の罪を確定させるかのように静かで、それでいて絶対的だった。私はその場に座り込んでしまいそうになるのを必死に堪えた。膝が笑っている。指先が冷たい。

「……警察に、突き出すんですか」

搾り出すように聞くと霧島さんはしばらく無言で私を見つめた。それから、くつと喉を鳴らすように笑う。

「そのつもりなら、とっくに通報している。俺がこうしてお前の部屋で待っていた意味を考えろ」

彼の大きな手が、私の顎に触れた。冷たい指先がゆっくりと私の輪郭をなぞるように動く。ぞくり、と背中を何かが走り抜けた。

「俺はお前を助けてやれる。その代わり、お前には俺のものになってもらう」

「……あなたの、もの」

「そうだ。今夜からお前は俺と一緒にいる。どこへ行くにも俺が決める。何をするにも俺の許可がいる。お前のその身体も、心も、全部俺に預けろ。そうすれば警察に捕まるよりはマシな目に遭わせてやる」

彼の親指が私の下唇をゆっくりと撫でた。その感触だけで、身体の芯が震える。怖いはずなのに、なぜか目の奥が熱くなって頭のどこかが痺れていく。この男に捕まったら、もう二度と逃げられない。本能が警鐘を鳴らしている。けれど、それ以上に自分の中の何かが彼に引き寄せられていくのを止められなかった。

「返事は」

彼の顔が近づいてくる。吐息が混ざり合う距離。ウイスキーの香りが鼻腔をくすぐる。私は唇を噛みしめて、震える声で答えた。

「……分かりました。あなたの、そばにいます」

その瞬間、彼の唇が私の唇を塞いでいた。強引で食るようなキス。彼の舌が容赦なく私の口内に侵入してきて、奥の敏感な部分を擦り

上げる。頭の中が真っ白になった。腰が抜けそうになって、彼の胸に縋りつく。霧島さんは私の背中を抱き寄せ、逃げられないようにきつく抱きしめた。

唇が離れ、銀色の糸が二人の間に細く垂れる。彼はそれを舐め取るようにもう一度軽く口づけてから、私の耳元に囁いた。

「いい子だ。今夜からお前は、俺だけの共犯者だ」

その声は甘く、低く、私の心の一番深いところにまで染み込んでくるようだった。

彼に手を引かれて私は自室の寝室へと向かった。ベッドの上に押し倒される。スプリングがぎしりと軋んだ。見上げた彼の顔は逆光で影になり、瞳の光だけがぎらぎらと私を射抜いている。

「まずは、お前が誰のものを身体に教え込んでやる」

シャツのボタンが上から順番に外されていく。彼の指は無骨なのに、その動きは驚くほど繊細だった。ボタンが外れるたびに、冷えた空気が素肌に触れて身体が小さく跳ねる。霧島さんは私の反応を楽しむように、焦らすような手つきで衣服を剥がしていった。